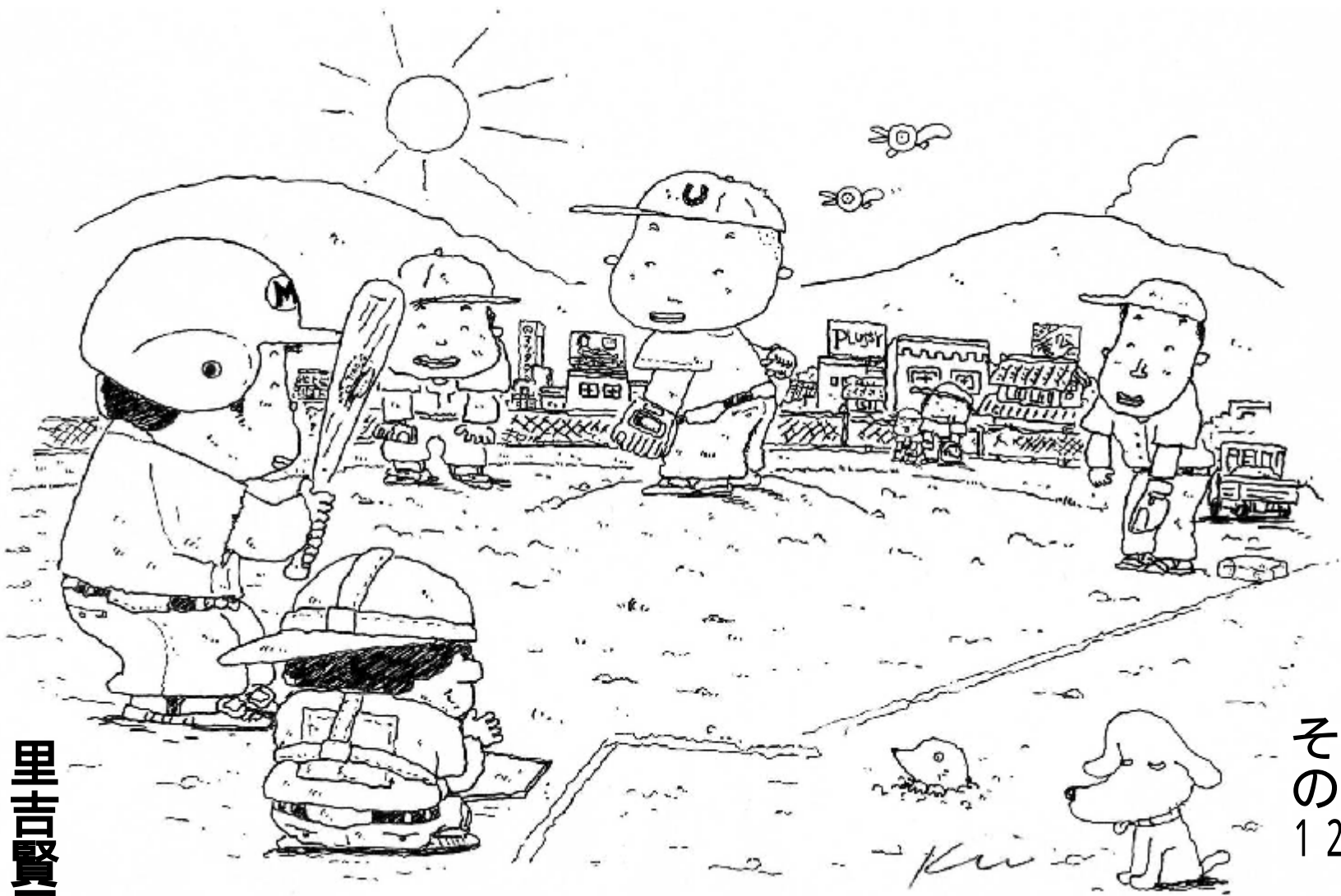


おじさんの青春日記

その
12



おじさん

新しい年の「ごあいさつ」を申し上げます。
旧年中のご交誼に心よりお礼申し上げます。

昨年相も変わらず、「犬も歩けば棒にあたる」の一年間でした。

胸に刻むべき人との出会いや、デジタルカメラの連続画面のように、忘れがたい情景に幾度も遭遇することが出来ました。そのひとコマ、ひとコマを小文に残しておきたい衝動に駆られたことは一度や二度ではありません。
ん。

私の生来の好奇心から、何度も質問を繰り返したり、他愛もないことに貴重な時間を割いておつきあい頂きました皆さま、どうぞお許しください。ありがとうございます。

「おじさんの青春日記」は一九九六年（平成八年）から毎年書き続けているものです。

ひとつは自分自身の内省のよすがとして。ひとつは同じ時代をともに生きている家族や親族、友人、知人の皆さんへの連帯のご挨拶として。そしてもうひとつは、息子たちをはじめ、私たちの後に続く周囲の若い人たちへ託すメッセージとして。

十二巻の全編を通じて、ご紹介する主人公はじめ、すべての登場人物への敬意の念と出会いの喜びを、私は今も抱き続けています。

今年の「おじさんの青春日記」その十二「序文は、昨年十二月、出張で訪れた中華人民共和国山東省・青島（チンタオ）市のホテルの一室で書き始めました。

今回は「青島」を題材に、第一部、第二部の二編の構成にてお届けいたします。

今年も元気で、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々へ「おじさんの青春日記」その十二「」をお届けできたことに感謝いたします。

皆さまのご健康をお祈り申し上げます。

二 八年（平成二年） 正月

事情により恒例の年初のホームページほかへの
リリースが遅れました。お詫び申し上げます。

おじさんの青春日記

その
12

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、
世界じゅうの孤独なおじさんに捧げる。

著者 里吉賢司

イラスト 栗原俊幸

「おじさんの青春日記」ホームページ
ホームページの「作品集」をご覧の方は画面ではなく、ぜひプリント
アウト(印刷)してお読みいただけます。ぜひお願いいたします。

www.urban.ne.jp/home/oji-san

黄砂（こうさ）吹く国から

（一）

ホテルの一七階の部屋から見渡す眼下は黄海（こうかい）から湧きおこる煙のような海霧に混じって、大地に堆積した黄砂（こうさ）が白く舞っています。

隣接した空き地では、古い建物の取り壊し工事が着々と進められています。赤茶けたレンガの建物は鉄骨がむき出しになって、蜂の巣のように同じ造りの部屋が密集した各層は、抜け殻となつて崩れかけています。むろん人影はありません。

こうした工事は市街のいたるところで進められていて、青島の街は各所でうなりをあげる重機の音とともに、けたたましい自動車のクラクションや町の人たちの喧騒で活気にあふれています。日本の街のように人はただ無言で黙々と歩くのではなく、ここでは言い争いのように聞こえる会話を交わしつつ、人々はにぎやかに、無秩序とも思える群れになつて街路を往來します。

山東省は中国で二番目、およそ九千百万人の人口をもつ、ほぼ日本一国に匹敵する巨大な省。

日本の九州や韓国・濟州島を東に見て東シナ海を北上すると、黄海に角（つの）のように突き出た山東半島の西南のつけ根に港都・青島（チンタオ）市があります。

人口はおよそ七百万人。青島をそのまま中国大陸の西へ進むと黄河流域の省都・済南市へ。山東省は中国随一の豊かな農産、海産をもつ地であり、とりわけ胶州湾という絶好の避難湾を持つ青島は、一九世紀後半から清朝政府によつて軍港としての整備が進められました。東シナ海を北進し、朝鮮半島の西海岸都市や渤海に臨む大連や天津を目指す船舶は、この山東半島のつけ根にある要港・青島の監視を逃れることができません。

第一次世界大戦での対ドイツ戦、続く日中戦争における日本が、山東省の持つ豊富な資源のみならず、地政的に極めて重要な意味をもつこの青島に真っ先に着目したことはいうまでもありません。

黄海を臨む青島の海浜を通ると、第一次大戦前のドイツ占領時代に残された赤い屋根のドイツ風の建物が今も数多く残っていて、今でも北京から

訪れる中国政府要人たちの避暑地として使われています。

二 七年十二月。広島から青島に運びこまれた食品焼成プラントの据え付け工事を見届けた私は、青島市街の中心地、香港中路にそびえるこのホテルの最上階に移りました。

このホテルもまた、今回の顧客である中国財閥系グループの一部門を成す企業です。ホテル幹部の配慮で、私は東京のホテルのシングルルームほどの料金で、四部屋もあるスイートルームに案内されました。

チエツクインの後しばらくして、ホテルの女性支配人が山盛りの果物が入ったバスケットを手に私の部屋に現れました。

「御社と我々のグループ企業との今回の合作事業の成功を祈っています。どうかあなたのご助力をお願いいたします。ご不便がありましたらなんなりと」

と、英語で挨拶を述べて立ち去りました。

慇懃（いんぎん）で、それでいて人心を逸らさない、したたかな中国商人の平素の仕事ぶりを垣間見た思いでした。

すでに年の瀬。社会主義の国、中国の街にあちこちからクリスマスソングが聴こえてくるのがなんだか不思議に思えます。

部屋のデスクに向かつて私は業務日誌を綴りながら、この商談の発端から、つい数日前まで続いた工場での最後の仕上げ工事までの記憶をたどっていました。

*

青島の胶州湾近くの広大な「青島経済開発特区」内に中国財閥系グループ企業と日本の大手食品会社とによって設立された、日中合弁の食品製造会社があります。この会社の工場へ私の会社の「食品連続焼成プラント」を輸出する商談が始まったのは、春のまだ浅い頃のこと。

基本契約が締結された後、およそ四ヶ月の機械の製作期間を含めて、完工予定は十二月という長丁場の仕事です

「冷凍お好み焼」など鉄板で焼く調理食品を、移動する多数の鉄板上で連続して焼きあげる一連の焼成プラントは、長さ十五メートル、焼成機械に連結する付帯設備を含む総重量は約四トン。

プラント一式は、広島での設計、製作、完成後の試運転・調整ののち、いったん解体され、横浜港から海路、青島へ。揚陸後そこからさらに経済

開発特区内に陸送され、巨大な工場の一角に据え付けられます。ここで再び機械の再組み上げと試運転・調整ののち顧客企業に引き渡されます。

「お好み焼」を連続的に焼き上げる機械から自動的に送り出された製品はベルトコンベアで運ばれ、急速冷凍装置のなかへ。そこで瞬時に凍結された製品はエックス線による透過検査などを経たのち、包装ラインを経て商品として出荷にいたります

プラント製作、据え付け工事だけでなく、当社スタッフによる「お好み焼」などの量産・運営ノウハウの供与も「売買契約書」の契約条項に明記されています。

プラント一式の日本での製作作業と並行して、現地の工場では中国側企業による内装工事、電力工事、電気配線、エア―動力配管、ガス配管などの工事が続けられました。

暦（こよみ）が晩秋から師走に移ろうとする頃、日本から到着した何トンもの資材が、大掛かりな重機によって工場に搬入され、日本側スタッフ立会いのもとでいよいよ輸出梱包の開梱（かいこん）作業が始まります。

日本側工事スタッフの青島到着直前までの情報とは大きく違って、中国側企業による作業は大幅に遅れてしまっていました。

一週間の予定のプラント組み立て、据え付け工事は、立ち上がりから日程の見通せない状況に立ち到りました。

遅れている工程をなんとかとり戻そうとあせる、日本の技術者たち。ゆったりとした動作で、しかもどう見てもねじれたままの柱をむりやり溶接する作業を繰り返す、中国の内装業者。ガス本管の連結を待ちわびる日本人技術者を尻目に、配管の工事人たちは床に座り込んで、日本から運び込まれた焼成機械を物珍しそうに手で触りながら、仲間たちとあれこれ評定を始める始末。定時になると彼らはさっさと工具をしまいこんで、

「じゃ、きょうはこれで。次は役所の検査が通ってからね。検査はいつになるかわからないけど」。

朝鮮族、モンゴル族も混ざる中国人スタッフのなかで、日本人スタッフはわき目もふらず機械の周囲を巡って調整にかけ回り、工場内に緊迫した広島弁が飛び交います。

その日の仕事を終えたのち、開発特区内にあるホテルの一室で、青島ビールや紹興酒を酌み交わしながら話題にのぼるのは、中国人事業者たちの仕事ぶり。

図面や工程表をにらみながら、黙々と機械に向かい合う日本人技術者たちには信じられない光景に映ります。

「 能率、いうことを少しは考えてもらわんのお。正月も近いことじゃし、わしらもいつまでも待つとるわけにはいかんけえねえ。それにあの工場の床のレベル（注・水平度）、どう見てもひどう狂つとる。それも心配じゃ
と、機械の調整を担当する技術者。

仕事の後の解放感も手伝って、その日の出来事が面白おかしく披露されます。

「 じゃがねえ（注・でもねえ）、三十秒とたがわずに新幹線がホームに入ってくるのが当たり前の日本を基準にして、ものを考えちゃいけないのじゃないか？ 『郷に入らば郷に従え』という言葉もあるじゃないか。彼らも我々日本人の仕事ぶりを目の当たりにして、きつと何か感じることもあると思うよお。寒いなかで大変な仕事じゃとは思うが、我々の納得のいく仕事をやって広島へ帰ろうや
」

私の精一杯の部下たちへの慰労の言葉で、その夜の小宴はお開きとなりました。

テーブルに散らかった酒瓶やコップを片付けながら、私はこの三月、広島私の会社を訪れたアフリカ人研修生達のことを思い出していました。

まだ山には雪も残る頃、ガーナ、ザイル、ザンビアなど南アフリカ七ヶ国の公務員たち二十人ほどが、日本外務省の開発途上国支援事業の一環として、私の会社へ産業研修にやってきました。その時の、或る小国の産業奨励を担当する政府公務員の言葉が耳を離れません。石炭のように艶（つや）やかで漆黒の肌をもつ彼は、低い声のクイーンズイングリッシュでつぶやきました。

「 豊富な埋蔵資源を持ちながら、わが国に生まれてくる新生児の四割はエイズに犯されています。国民の平均寿命は三八歳、町は失業者であふれています。今、私たちに必要なのは日本のマツダのような最先端の生産手段ではないのです。一枚の鉄板があればいい。その鉄板を道具にして、わが国の農畜産物を使って、国民の二人か三人でもその日の暮らしを成り立たせることはできないか。そんな手法や起業の方策を私たちはあなた方から学んで帰りたいのです」。

翌日昼、いつになるかもわからないという役所の検査をホテルで待つ我々に、工場から召集の報せが届きました。

不思議なことに工事中の現場は、前日まで残されていた多くの課題は中国側によってすっかり片付けられてしまっているのです。そして見渡すばかりの工場の床や壁は、白衣を着た圧倒的な人の群れがどこからともなく

結集してきて、それぞれが手にもったタワシと薬品で磨き上げ、またたく間にゴミひとつ無い衛生的な食品製造工場が目の前に出現しました。

中国政府が重要国策として強力に推進する経済開発特区内における合併事業では、「(地方)役所の検査」はどうやら無きに等しいものようです。

同じ地球のなかにありながら、それぞれ置かれた状況があまりにも異なる日本、中国、そしてアフリカの国々。その国旗のもとで、無数の民がそれぞれ異なる現実に直面しながら日々を送っていることを思いました。

忘れられないホテルでの出来事がありました。

ある日の朝、工場での約束の時間が迫った私は、ホテルの洗面室で洗濯をしかけた下着や靴下を、陶器製の洗面台のなかにおいたまま部屋を飛び出して、車の待つ玄関へと急ぎました。

夕刻、部屋に戻ってみると、下着も靴下も丁寧に洗われて浴室内のハンガーに整然と吊るされているのです。一瞬、狐につままれた思いがしました。

私はすぐにフロントに電話して、私の部屋の掃除係と日本語通訳に部屋に来てもらうよう依頼しました。私の下手な英語の説明に、何かと不安げなフロントの係員。

五分もたたないうちに、金モールをあしらった軍服のような制服を着た女性の日本語通訳が、おっとり刀で私の部屋にやってきました。六十歳をとうに過ぎて見えるメイドさんが後ろに従っています。

私は扉を開けて二人に洗面室のなかを見せ、

「これはあなたが洗濯して干してくれたのですか」

そのメイドさんに尋ねました。

メイドさんはおびえたように下をうつむいたまま。

「いや、私は苦情を言いたいのではない。その逆なんです」

通訳がやつと意味を理解し、中国語でそれをメイドさんに伝えました。

「私はあなたのご親切にお礼を言いたいと思って、わざわざ部屋まで来てもらったのです。私は日本はもちろん色々な国のホテルに泊まっていますが、このような親切にふれたことは今までただの一度もありません。ここ青島が初めての体験です」

こう話すと、そのメイドさんはそれまでの伏せ目がちの顔を上げ、晴れやかな表情に変わりました。そして彼女は、掃除のために部屋に入ったとき、洗面台に放置したままの洗濯物を見つけてそれを洗い、ハンガーに吊

るして干したことを早口の中国語で説明し始めました。想像していたとおりでした。

「……私の会社に、もしもあなたのような社員がいたなら、私はきっとその人のことを誇りに思うと思います。どうもありがとう」

そう言って、私は用意していた二十元(約三百円)ほどのチップを彼女に渡そうとしました。すると彼女は、首を大きく振り、両手を後ろに回して頑(かたく)なに受け取るうとしません。もともと中国には欧米のようなチップの習慣はありません。

私は通訳にそれを受け取ってくれよう説得を依頼しました。

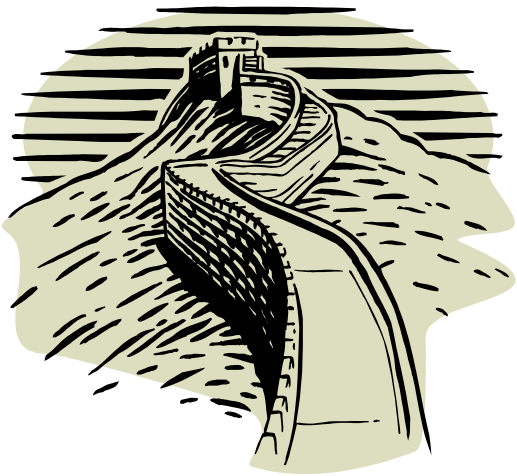
何度かのやりとりの後、このチップでおやつを買って、休憩時間にメイド仲間と分け合うことを条件に、彼女は「シエ、シエ」と何度も礼を言いながら二枚の紙幣を遠慮がちに受け取って部屋を出ていきました。

上海や他の都市に出張経験のある社員から、中国のサービス業者の客に対する粗雑な扱いや、業務における「ホスピタリティ」という概念すら乏しいことを何度も聞かされていた私は、この出来事は想像すら出来ない驚くべきことのように感じました。

経済特区の開発が進み、新興のライバルホテルが次々と建設される情勢での従業員教育の成果、ということもあるかもしれませんが、しかし、あの純朴なメイドさんの様子を見るかぎり、会社の教育やマニュアルに従ったサービスとはとても思えませんでした。社会主義国であろうと、資本主義国であろうと、やはりそれは「人物」、その人柄がなせることなのだと思いました。

以来、彼女はたまに私と廊下ですれ違つと、にこやかな「シエ、シエ」のあとに、片言の日本語で「アリガト」と言ってくれようになりました。

私は彼女の日々の暮らしぶりをのぞいてみたい思いに駆られました。



工事の完工をこの眼で確認し、客先の要人への挨拶をすませて日本に帰国した私は、初めて体験するプラント機械の輸出と海外での工事という疲れもあつて、激しい脱力感に陥（おちい）ってしまいました。

価格決定や決済条件はもちろん、基礎実験が始まって、設計、製作、輸送、現地引渡し、そして商品の量産指導が完了するまでの過程を、あらゆる不確定要素とリスクを想定しつつ、時系列に文字化する「契約書」の作成。顧客との交渉の後の度重なる契約条項の修正に神経をすり減らす日々が、春から例年ない猛暑の残る秋まで続きました。国境を越えた商いは、わずかな油断が致命的な損失につながります。

日本へ帰国後、私は数日ぐったり寝こんでしまいました。

そして、書架にあつた山崎豊子さんの史実をもとにした小説「大地の子」を、朦朧（もろろう）としたまま読み返し始めました。

満州（中国東北部）開拓団員の子として生まれ、日本敗戦の際、動乱の極みなかで家族とはぐれて中国残留孤児となった、陸一心（日本名 松本勝男）は、中国の人買いの間を転売されたあげく、運良く拾われた中国人養父母、陸徳志、淑琴夫妻の命がけの慈愛によって成長します。

「小日本鬼子」（シアオーリーベンクウィツ）と蔑（さげす）まれつつ少年時代を送り、折りからの「文化大革命」の思想に凝り固まつた党幹部の誤審によつて五年間もの間、内蒙古の草原にある政治犯収容所へ幽閉されます。命の恩人でもあり、後に一心の妻となる看護婦、江月梅や、父親である老教師、陸徳志の職を投げうち、厳寒の北京の路上に数ヶ月にわたつて寝起きしての中央政府への直訴によつて、陸一心は北京政府重工業部への復職がかないます。

やがて日本と中国との国交が回復し、陸一心は一九七七年（昭和五二年）に始動する日本と中国合作による総工費五千億円という、中国の国運をかけた巨大製鉄所・宝華製鉄所を建設するプロジェクトに製鉄技術者として抜擢されます。

日本側製鉄プラントメーカーの現地責任者として赴任した一心の実父、松本耕次と偶然が重なり、四十年の歳月を経たのち父子は再会します。日本で共に暮らそうと迫る父親。その申し入れを断つて、陸一心は「大地の子」として中国で暮らすことを決意するというストーリーです。

この小説のなかで、日本で製作され、現地・中国に納入された建設用のアンカーボルト（注・一方を地中あるいはコンクリート内に埋め込み建造

物などを固定するボルト）六百トンに錆（さび）が発生するという事件が起こります。

中国側技術責任者、陸一心は、まだ実父とも知らぬ日本側現地責任者、松本耕次に厳しく詰め寄ります。

松本耕次は言います。

「今、錆がどっちの責任であるか追及するより、遅れている工期を取り戻すためにも、今回のアンカーボルトの錆や些細な寸法違いは機能に支障なし、として早急に検査を終わらせ、ボルトを必要とする現場へ渡して戴きたい」

松本はあくまで冷静に云った。陸一心の眼が鋭い光を帯びた。

「……では松本先生に質問しましょう。先生が、上海の南京路で新しいワイシャツを買う時、ワイシャツの裾に汚点（しみ）があると思います。裾はスポンのなかに入れてしまつからと云つて、汚点（しみ）がついているのを、買いますか」

「思いがけない比喩に、さすがの松本も口ごもつた。
「われわれの云い分は、そこなんです。貴重な外貨を使って、最新鋭製鉄所を造る意気に燃えているわれわれは、いささかの妥協も譲歩もできません。公式の『開梱検査記録』に記述して、上にあげます」

陸一心が云った。

「それがお国のやり方なら致し方ありません。しかし、錆は基礎のコンクリートに埋もれ、ねじ山もナットで充分、締めうる機能があり、何の支障もないことを、後日、理論的且つ実践的に証明してみせましょう」

松本は中国側のクレームに、あくまで平静に説得するように云った。

「大地の子」 下巻より

ことし二 八年八月、北京オリンピックピックが中国各地で開催されます。

山東省・青島はヨット競技の会場として、市をあげてその会場準備と建設の槌音（つちおと）に沸いています。

一九七七年十二月五日、小説のなかの陸一心らが精魂を傾けた、宝華製鉄所建設の工程指揮部が発足してちょうど満三十年。中国最初の本格的近代製鉄所の建設が着手された当時、中国政府の持つ外貨準備高はほぼゼロ、もしくはマイナス。そしていま、世界の約四分の一の人口を占め、長い混乱と眠りから覚めたこの巨大な国が保有する外貨準備高は、およそ一兆ドル（百十兆円）に達しています。

山東省西部を流れる黄河流域に黄河文明が弱々しく生まれたのち、秦、漢、魏、隋、唐などの時代から中華人民共和国建国にいたるまで、侵略戦

争と内乱に明け暮れ、近・現代においては、欧州列強や日本に翻弄（ほんろう）された歴史をもつ中国は、二十一世紀初頭において初めて、自主独立・統一をほぼ確立したように映ります。

中国国内で出会う中国人に、私が広島からやって来たことを話すと、彼らのほとんどは一瞬とまどいの表情を見せます。

ある人は、

「ヒロシマにはまだ放射能が町じゅうに残っているのですか？」

と真顔で私に尋ねました。

異民族への侵略や同族が骨肉相食む殺戮（さつりく）と、自国に対する干渉に蹂躪（じゅうりん）され続けた歴史を持つ彼らにとつてなお、日中戦争で味わった苦渋はまだ記憶と体験のなかに新しく、それはヒロシマがこつむつた悲劇と引き換えに清算されるものではないように思えました。

青島経済開発特区での合作事業にあたって、私たちの現地におけるパートナーとして業務全般の後方支援を委託し、献身的な尽力を頂いた、青島衆一佳商務有限公司・総経理（注：代表取締役社長）、張建成氏（四二歳）は、青島の日本語専門学校を皮切りに、通算八年以上の日本語専門教育を受けた日本通です。

彼の幾人かの親族もまた、民間人にもかかわらず日中戦争さなかに日本軍のいわれなき迫害を受けた受難の歴史を背負っています。

以下は私からの便りに対して張建成総経理から届いたメールの一節です。

「（略）中日両国は世界中にも数少ない長い歴史を持つている国であり、賞賛に値される時代もあるし、教訓を吸収する苦痛な歴史の追憶もあります。特に近代時期の侵略戦争で両国の民衆が大きな災難に遭ったという事は深く心に留めている事です。

ですから、『歴史を鏡にして、未来に向かう』という指導者らの指摘は大きな知恵であり、何よりの発展方向だと思われます。中国人の私はその通りと感じております。（中略）過ぎ去った不愉快な歴史の認識に対して、里吉さんの心からの気持ちはとてもよく理解できていますし、尊重に値するものと思います。言われるように、我々一人一人で相互努力しておこなったことが友情の基礎ですね」

そのメールの最後の行はこう結んでありました。

「お互いに仲良くするように頑張りましょう」

ともに生あるうちに

ここにあらためてユートピア野球部・土井道治監督へ、これまでのご温情に心からの謝辞をお伝え申し上げます。

土井さん。本当に残念なことに、今年の十二月八日、私は中華人民共和国・山東省青島（チンタオ）に滞在していて、恒例の年一度の特別な昼食をあなたとご一緒出来ないでいます。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、空母「赤城」を旗艦とする日本海軍機動部隊が、アメリカ合衆国ハワイの真珠湾（パールハーバー）内に停泊中の米國太平洋艦隊を奇襲攻撃した、まさにその当日、土井道治さんは広島県安芸郡坂町に誕生しました。

真珠湾攻撃の華々しい戦果に沸く広島で土井さんが産声をあげた頃、九州沿岸から西へわずか千キロの距離にある青島では、杉山六蔵中将指揮下の第三支那派遣艦隊が黄海を睨（にら）んで、最高レベルの警戒態勢をとっていたのです。

一九一四年（大正三年）の第一次世界大戦勃発時、ドイツ占領下にあつてドイツ東洋艦隊の本拠地であつた青島を、日本は当時の日英同盟に従つて多大な流血を代償に奪い取りました。その後も続く日本による青島領有は太平洋戦争勃発の遠因にもなりました。

日本軍による真珠湾攻撃のこの十二月八日、たまたま私が中国・青島に居合わせたことを奇縁なことに思い、私は電話で誕生日のお祝いを土井さんに伝えました。

土井さんと私、ともに歴史好きの私たち二人は、毎年十二月八日のその日、

「リメンバー、パールハーバー！（真珠湾奇襲を忘れるな）」

と笑い合つて、土井さんの誕生日を祝つとともに、平素の無音（ぶいん）を埋める昼間の小宴を共にする習慣がここ何年も続いています。

太平洋戦争の火蓋（ひぶた）が切られた、まさにその当日生まれた土井さん。日本が敗れたのち、開戦時の内閣総理大臣兼陸軍大臣として戦勝諸国からA級戦犯とされた東條英機大将が、開戦から七年の後、東京・巣鴨

拘留所で絞首刑を執行された、その十二月に生まれた私。

私たちは太平洋戦争の勃発、そして日本敗戦、という日本史上特筆すべき大転換期のさなかに生まれたのです。

広島への原爆投下の日を、当時まだ四歳に満たない土井さんは鮮明に憶えているのだそうです。

「前の日にどこかの結婚式があつてのお。食糧難でめつたに食べれんぞのご馳走の残りを、お袋と二人で朝飯がわりに食べようとしたり、まさにその時じゃ。西の方角でとてつもない閃光と爆発音が『ボガンッ！』じゃ。塀は倒れる、窓ガラスは吹き飛ぶ。あとはもうメチャクチャよお。それが八月六日の朝のことじゃった。とてもご馳走どころじゃない。わしゃあ、それ以来、出された料理は好きなもんから真つ先に箸をつける習慣がついてしもうた。食べ物の恨みはこわいもんでえ。わあはっはっはっはっ」

被爆直後の惨事を語ることはなく、からつとしたユーモアを交えながら土井さんは話します。エスプリを効かせて悲劇を喜劇のように、喜劇を悲劇に変えてしまういつもの土井さん独特の話術です。

土井さんとの小宴はイタリアンの店であつたり、馴染みの寿司屋の片隅であつたり、三時間を過ぎても二人きりのとりとめのない談義は尽きることはありません。仲間の近況確認に始まって、二人の夢想家の談義はその時々国際情勢や国内政治、近頃読んだ本の感想、作家論、日本史や世界史の二人の私論、果ては人類の文明論へととめどなく拡がります。それにちよつとエッチな話題も織り交ぜて。まるで地球をバレーボールほどのサイズに縮めて手に乗せ、眺めつつ古今東西を語り合う哲学者のように。

*

昭和四十年代後半（一九七〇年代）頃のこと。私の同級生が中心になって、職業も年齢もバラバラの草野球チーム「ユートピア」が結成されました。

最年少の中原泰三君は高校生（センター）、最年長は三七歳の食品会社社長、楠原眞之介さん（ライト）。部員の数だけは二十人近くいるものの、約束の日曜日にグラウンドに来てみると、頼りとするピッチャーもキャッチャーも来ていないことがしばしばでした。

明治維新の翌年の創業、日本最古の株式会社といわれる日本の代表的な書籍販売会社・丸善の広島支店野球部がユートピアと実力伯仲するライバルチームでした。というよりも、ユートピアは歴然と力量の勝る相手とは対戦しないという、実に腑甲斐（ふがい）ないチームだったので。

野球シーズンは早春に始まり、陽をさえぎる木陰もない炎暑の夏、冷たい雨の降る晩秋まで、グラウンドでの対戦が何度も繰り返されました。丸善チームのなかで小柄な体でひとときわ敏捷に動き回り、ベンチからバットを片手に、横柄な態度で我々に野次をとばす監督兼内野手がいました。土井道治さんでした。

「君らあ、さっきまで徹夜マージャンしてそのままグラウンドへ来たんがすぐわかるぞお。ウシらをなめとるんかあ？ 背番号四六番っ！ なんじゃあっ！ そのへっぴり腰は！ 性根（しょうね）いれてやらんと怪我するぞおっ、しまっていこうでえっ！」

土井さんは高校野球やプロ野球、そして野球理論にも驚くほど精通していて、自軍だけでなく、我々ユートピアのメンバーにも野球の心得を独特の口調で指導していました。試合の終わったグラウンドで、土をいとおしむように黙々とトンボ（注・グラウンドの土をならすT字型の道具）を押す土井さんの姿を憶えています。



伝統ある丸善の社員として洋書を抱えて大学の研究者たちのもとへ日参して、彼らに求められるまま書籍を売り歩く単調な日々を快（こころよ）しとせず、土井さんは新しい大学の設立や研究施設開設の情報をどこからかいち早く入手して、大量の書籍はもちろんのこと、図書館の施設から備品まで丸ごと受注するという戦略的な営業に長（た）けていることを、丸善チームの一員から聞き出しました。

それに加えて、上司の指示には従わない、会社の経費は強引に事後承諾。二言目には、

「バカ上司の言うことなんか、聞けるかつ」
が口癖とも。

紳士的で温和な人柄の多い当時の丸善社員のなかにあつて、土井さんの破天荒な言動はひときわ目立つ存在に私達には映りました。

私が土井さんを知つて間もなく、丸善書籍販売部門のトップセールスマンであつた彼は、今で言う「起業」を志して丸善を辞職しました。

彼の高校時代からの親友の熱心な勧めで、当時のソ連や東欧諸国の農水産加工品を輸入販売する商事会社を設立。二九歳。

大阪での華やかな万博開催に続く、田中角栄首相の「日本列島改造計画」が発表され、日本経済はまだ二桁に近い成長の途上にありました。

三十歳前にして抜きん出た行動力と戦略を持つ人ですから、彼は組織のルールや保守的な社風に縛られるサラリーマン生活に嫌気（いやげ）がさしたのかもしれません。そして彼は会社という組織の本質や宿命、サラリーマンとしての自らの人生を、彼独特の視点で見通してしまったのだと思います。

「このまま係長になり、課長になって、あるいは本社への栄転も。しかしそれが一体何なんや？自分には湧きあがるマグマのように抑えがたい、人生を賭けた仕事への夢や理想がある。欲望もある。こんなこと、いつまでもしとつちやいけん」
「そう思つたに違いありません。」

丸善を退職した土井さんは、当然のことのようにユートピア野球部監督に迎え入れられ、キャプテン格の私をはじめ、さまざまな属性をもつメンバーに混じつてさらに交友を深めることになりました。

父親の遺した電気バリカン工場の再興に試行錯誤を続けるその頃の私と、大手企業のサラリーマン生活から飛び出して、徒手空拳（としゅくうけん）ともいえる状態で事業経営の道に飛び込んだ土井さん。

私は野球以外の場でも、共通する苦悩をもち合う者同士の絆（きずな）のようなものを感じていました。

兄のような存在として、処世の師として、つかず離れず三十年余にわたる土井さんとの交流から、様々な影響や示唆を受けたことが山のようにあります。

それは私の精神形成にも大きな影響を与えました。土井さんが知らぬあいだに、私がこっそり盗みとつたのかもしれませんね。

物事を論理立てて的確に判断する土井さんの秀逸な能力と、「正論」と現実に起こる事件の対応はあくまで別個のものとする、柔軟で現実的なものの考え方。そして局面に応じて実にタイムリーに繰り出される豊富なボキヤブラリー（語彙）と歯切れのいい実行力は、見ていて清清（すがすが）しささえ感じたものです。

土井さんは後年、いまの事業が安定した頃、冗談を交えながらに私にこう語ったことがあります。

「本を抱えて大学の教授のもとへ通ううちにやがて先生とも親しゅうなる。本屋を十年もやったりや、彼らが学者として求めているものが段々に解るようになってくるんじゃない。彼らは知識の森をさ迷うのが生きがいの、いわばまあ、学問の職人よお。会社勤めの若い頃、わしは彼らからまず、『研究者』というもんが世のなかに存在すること、そして『教養』ということの本来の意味と、その大切さを直感的に学んだような気がする。ああ、今のわしにはそれが足りない、とつくづく思ったもんよ。もっとも、今やつとる商売にやあほとんど役にたたんけどのお」

ユートピア（理想郷）のような夢を語りながら、経営の経験も手法も資源も極めて貧弱な二人の起業家は、薄暮のなかに懸命に光明を探していたような気がします。

土井さんが丸善を退職して起業した輸入商社は順風満帆、というわけにはいかなかったようです。

数年後、その商社が結局破綻したのち、土井さんはしばらく模索と転変の歳月を送りました。彼にとつて不遇の時代だったのかもしれないが、いつ会つても彼の口から愚痴めいた言葉を聞いたことは、ただの一度もありませんでした。

私と別れる時は野球の時と同じように、魚市場の若衆のような威勢の良さで、

「しまつていこうでえっ」

と、扉を開けながらドスのきいた声で活（かつ）をいれるのが常でした。それは自分に対する掛け声でもあったのでしよう。

「何人（なんびと）といえども弱音を吐く姿は見せられない」。

南方の戦場で生死の淵をさまよった海軍軍人を父親に持つ、戦中生まれ

の土井さんの矜持(きょうじ)であり、彼の美学だったに違いありません。明快に物事の本質をつかむ能力、そして人間に対する彼独自の視点と野生動物のような勘。それは借り物の理屈を寄せ集めた評論ではなく、オリジナリティに富んだ説得力をもつものでした。これは彼の天与の資質に加えて、会社組織から離れて一匹狼となって以来、一人きりの彷徨(ほうこう)のなかで、右か左か、行くか退くか、の苦渋の決断を迫られ続けた彼の体験に由来するものに他なりません。

*

真夏に汗をしたたらせて野球に興じた世代から、まるで林のなかを見えない疾風が吹き抜けるように、三十年という時間が私たちを通り越していききました。もはやバットを振る体力も時間もなく、ユートピア野球部は部員それぞれの青春と重なり合う、朽ちかけたノスタルジアになるうとしています。

土井さんはいま、創業二七年、無騒音の杭打ち工法をはじめ多様な土木技術をもつ広島有数の土木会社のオーナー経営者として、今も現場を飛び回っています。現在の仕事も彷徨の末の、人との出会いが開業のきっかけになりました。

「わしゃあ土木の技術や難しい専門知識はなーんもわからん。こむずかしいことは若いもんに任せて、ただブラブラしとるのがわしの仕事よお。周囲の人に可愛がつてもろうて、どこからか自然に仕事は入ってくる。ありがたいことじゃ」

そう謙遜する土井さんですが、建前の表社会にも、本音の裏の世界にも鋭い眼光で目配りを続ける土井さんの姿を、私には容易に想像することが出来ます。

土建業には付き物といわれる闇世界の人達とのイザコザも含めて、彼がくぐってきた命がけの修羅場の数。それに長年馴染(なじ)んだ書物から得た、知識と洞察が加わります。これらが混然となって、彼独特の「人間観・歴史観」は円熟の領域に入りつつあるように見えます。

「お互い業界も違うし、商売の話も駆け引きもなしに、遠慮なくこうしてあなたと二人、トインビーがこう言うとか、マキャヴェッリのカエサルへの評価がどうの、司馬遼太郎のどこが面白い　なんて話すこんな時間、平素はないもんねえ。」

だいいち、土建屋の仲間じゃ、こんな話しが出来る相手がおらん。あな

たには体に気をつけてもろうて、ずっと元気でおってもらわんといけん。ジムにでも通うたらどうや？その煙草、もうやめなさいよお」

毎年十二月八日の二人の特別な昼食の時、土井さんは決まったように私にこう語りかけます。

あるとき土建業の現状や将来を私が何気なく尋ねたことがあります。

土井さんは待つてましたとばかりに、にわかにな真剣な口調に変わって答えました。

「この業界には大昔から続いたいわゆる『名義人』という制度があつて、大手ゼネコン（土木建設会社）を頂点に各種の工事内容に応じて、仲間の会社のなかから担当工事会社を決めて工事にかかるわけです。根元の発注会社があり、下請け、孫請け、ひ孫請け、と上から下へ、会社規模や技術に応じた階層構造になっています。それが昨今の公共事業の激減に加えて、従来は仕事配分の調整機能になっていた公共工事の談合行為などは、『公益に反する違法行為』とされる時代になりました。中小零細企業でも大きな工事の競争入札に加わることが出来るようになった。しかし、そのような企業には工事に当然必要な管理技術や資金、人材など、いわゆる工事遂行能力は乏しいわけです。不良工事が発生したり、工事が途中で立ち往生する可能性さえある。

たとえば、ほとんどの中小土木会社が工事の発注先から受け取る工事代金の六〇%前後は約四ヶ月の約束手形、すなわち発注元企業に対する信用貸しです。銀行のように担保や保証人をとれるわけでもない。残り四〇%が現金。

約束手形だから六〇%分の代金は四ヶ月間待たないと現金になつて手元に入らないわけです。工事を請け負った会社は、社員の給与はもちろん、日々の経費は現金で出ていきます。四ヶ月待てない場合はどうするのか。あるいは最悪の場合、発注元の会社がある日突然潰れてしまったら、工事代金として受け取った六〇%分の約束手形はただの紙切れになつてしまう。土建業界全体が現金の流動性が非常に悪いわけです。

今までは義理と人情や助け合いでやってこれましたが、これからはそうはいかない。資金源である銀行主導による合併や統合が、中小零細企業でも多発する時代になるでしょうし、確実に淘汰の時代になるでしょうね。これは大きな社会問題だし、国や自治体も今はまだ試行錯誤の状態にあると思いますねえ」

門外漢の私にも容易に理解できる明快な説明でした。

叩き上げの職人親方の多い中小の土建業のなかで、彼ほど冷静に業界の現状や行く末を見つめている経営者は少ないのではないか、という気がし

ます。

彼が若き日に籍をおいた大手老舗、丸善は近年、詐欺まがいの債権投資で莫大な損失を計上し、経営革新に立ち遅れたこともあって、会社は国による「産業再生法」の適用を受けるまでにたち至りました。明治維新以来、「あらゆる分野を網羅する日本の英知の源泉」とまで言われた栄光は今や無く、かつて広島の超一等地を占めていた大書店は現在、跡形もありません。

土井さんがこの数年、夢中になって読み続けるローマ在住の作家、塩野七生さんの描く古代ローマ時代の興亡や、その紀元前から一年もの間続いた歴史への興味は今も彼の思索の糧になっています。

塩野七生さんはその本のなかでこう語っています。

「(略)後世の私たちは、ローマがこの危機を乗り越え、のちに大帝国に成長したことを知っています。(中略)勝者はけっして最初から勝者であったのではない。無数の敗北や失敗を乗り越えてきたからこそ、彼らは勝ち残れたのであり、だからこそローマの歴史は混迷する現代日本に暮らす私たちにも無数の教訓やヒントを与えてくれるのだと思うのです(中略)」

ローマ人とはつくづく「リストラ」に長けた民族であったという事実です(中略)本来の意味でのリストラクチャリング、すなわち再編成なり再構築に何度も成功したからこそ、ローマは千年にも及ぶ長い歴史を持つことが出来た。同じ地中海世界に属すギリシャが文化や政治や経済において華やかな成功を収めても、その輝きが長続きしなかったこととは対照的です(中略)

古代ローマ人の「システムとはたえず補修、改定していくものである」という思想がもつともよく表れているのが法律に対する彼らの態度でしょう。

「人間の行動原理の正し手を、

宗教に求めたユダヤ人。

哲学に求めたギリシャ人。

法律に求めたローマ人。

この一事だけでも、これら三民族の特質が浮かびあがってくるくらいである(中略)ローマ人が宗教でもなく、哲学でもなく、法によってみずからの行動を律しようとしたのは、ローマ人独特のメンタリティ(注・精神構造)、「敗者をも同化する」という特質と大いに関係があります。(中略)」

唯一絶対の神をあがめるユダヤ人にとっての「仲間」とは、同じ信仰を持つ人だけに限られる。また、ギリシャ人の説く哲学はたしかに素晴らしいものではあっても、その抽象的思考を理解し問題意識を共有できる人は人類全体からすればあくまで少数派で

す(中略)

これに対して、法は違います。同じ信仰を持っていなくても、同じ知的レベルになくても、法というルールを守って生活している限りは一緒に暮らしていける」

「ローマから日本が見える」より

土井さん、私は思うのです。

お互い二十代から今日まで、独立独歩、群れにも属さず、意地を通して今日までどうにか事業経営を続けてきました。我々は出自や学歴や組織内の序列、時によっては内部抗争によって人生を左右されつつ仕事を続ける、組織人達とはまったく別次元の、ひとたび判断を誤れば「板子一枚下は地獄」という実にはリスキーで、そしてスリリングな「商売人」としての日々を長きにわたって送ってきました。それは決して横文字の「マネージメント」などといわれるようなカッコいいものではありません。

この私にしても、あなたと同じように「こうしたいと思う、こうすべきと信じる」ことを懸命にやり続けただけで、他からの支配や指示に従ったことではありません。

自分が企図し、あるいは承認した「社会に対する渾身(こんしん)のプレゼンテーション」がうまくいけば顧客に歓迎され、受け容れられる。その結果の一つとして、振り向いてみれば「利益」すなわち儲けがそこに残っていたに過ぎない。もちろん、その正反対の結果もあります。

極論すれば、ひたすら自分の思いの結晶を表現したい、立てた仮説を現実のものとして証明したい、そして広めたい、だけなのかもしれない。

自他を考えてみると、目先の利益や拡大だけを目的とした目論見(もくろみ)は、逆の結果を生むことの方が多かったような気がします。

私たちは熱い思い半ばにして姿を消した、数多くの事業家達をこの目で見てきましたよね。

土井さん。

一人の自然人として、この作業を私たちはいつまで繰り返すつもりなんでしょうか。釈迦に始まる東洋独自の思想、「刹那無常(せつなむじょう)」を一哲学として語るだけでなく、たとえば古代ローマ人に倣(なら)って、構造や手法を環境に合わせて、ためらわず柔軟に改変する。そして同時に、重要なことからは有効な法に則(のっと)って、あるいは私的な成文律として、次代に継承する作業を始めるべき時がすでに到来しているように思えるのです。

私たちユートピア野球部は創立後、すでに二人の仲間を、ともに事故によって四十代という若さで失いました。山村安守さん（シヨート）、山田直弘さん（ファースト）。

土井さんに捧げるこの『ともに生あるうちに』を、ユートピアの仲間から彼らへの変わらぬ友情と追慕をこめて、二人の魂へも贈ることをどうぞお許しください。

もうひとつ。この「おじさんの青春日記 その十二」は、これまでのシリーズ集全十一巻とともに、国立国会図書館へ納本することを決めました。土井さんならとうにご存知と思いますが、国立国会図書館は納本制度によって、日本国内で出版されるすべての出版物を収集、保存する法定納本図書館です。現在までの総蔵書数はおよそ一千二百万冊。その根拠法である国立国会図書館法の前文には、設立の理念が高らかにこう謳（うた）われています。

「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にすると確信に立って、（中略）ここに設立する」と。

土井さん。

私たちの時代に生きた、庶民のささやかな記録が国法によって半永久に保存され、ひよつとしたら何世紀もの後、物好きな学者か誰かがそのデータベースのなかから、私たちや仲間達の名前を見出すことがあるかもしれませんよ。なんと痛快なことだとは思いませんか。

今年の十二月八日。ふたたび元気で、特別な昼食を共に出来ることを一年の楽しみにしています。

リメンバー、パールハーバー！

第一部 第二部 **参照文献・資料**

「大地の子」上・中・下巻（山崎豊子著・文藝春秋刊）

「昭和天皇独白録」（寺崎英成・マリコミラーテラサキ編著・
文春文庫）

「ローマから日本が見える」（塩野七生著・集英社インター
ナショナル）

「人びとのかたち」（塩野七生著・新潮文庫）

ほか

おじさんの青春日記 その12

著者 里吉賢司

発行者 733 0034

広島市西区南観音町一七番一〇号

株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二)二二二一・三三〇九(代表)

FAX (〇八二)二九一・三三四九

E-mail ken1221@urban.ne.jp

製本冊子頒価 一〇〇〇円(送料別)

発行 二〇〇八年(平成二〇年)一月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ ホームページアドレス
<http://www.urban.ne.jp/home/ojisans/>